

の教材開発を行った。その教材を使用した場合の教育的効果について検討を行ったので報告する。また、「フレンドリー」を支援する体制の概念図を図1に示す。なお、熊本大学は、熊本県伝統工芸館で実施されるものづくり体験活動用の教材の提案とともに、同活動の企画運営、講師派遣、工具の貸し出し、材料の提供等を行った。

2. 不登校児童生徒に対する支援

2.1 教育支援センター(適応指導教室)

県や市町村教育委員会が設置した教育支援センター(適応指導教室)は、不登校児童生徒に対する相談・適応指導を行うために学校の余裕教室や教育センター等学校以外の場所において、学校生活への復帰を支援する事業である。現在、実際に不登校児童生徒が通級する割合は全国平均で約1割にとどまっている。しかし、不登校の児童生徒が活動する場所として、あるいは支援の場所としての教育支援センター(適応指導教室)の役割は今後ますます重要となるといえる。

2.2 熊本市教育センター適応指導教室「フレンドリー」

熊本市教育センターでは教育相談事業の一環として、「フレンドリー」を行っている。本活動は、心理的・情緒的要因等により登校できない児童生徒への個別カウンセリングや集団活動を通して自立できる力を育て、学校復帰を目指している。本活動は、後述するユア・フレンド事業により派遣された大学生や熊本市教育センター嘱託の指導員が、活動を補助している。「フレンドリー」の主な活動内容とそのねらいを表1に示す⁹⁾。平成14年度に熊本市教育センターへの不登校に関する教育相談は149人であり、そのうち97人が「フレンドリー」に参加し、さらに何らかの形で学校に復帰した児童生徒は49人(33%)であった。

2.3 ユア・フレンド事業

ユア・フレンド事業(以下、ユアフレンド)は、熊本市教育委員会が行ってきたメンタルフレンド事業を発展的に解消し、熊本大学教育学部と共同で始めた事業である。教員を目指す教育学部の学生及び院生が、熊本市教育委員会、児童生徒の所属する小・中学校及び、保護者等と連携をとりながら家庭や、「フレンドリー」等と一緒に諸活動を行うというものである。さらに、熊本大学教育学部はユアフレンドに参加する学生に対する研修・指導・助言を大学教育の一環として実施している。学校復帰を直接的に促すのではなく、児童生徒の相談相手になり、友達として児童生徒に接するのが目的である。派遣は週に1日程度で、1日あたり約2時間である。本事業に参加した院生・学生は平成14年度に84名、平成15年度に107名が参加した。

3. 不登校児童生徒を対象としたものづくり体験活動

「フレンドリー」における様々な所外体験活動の一つとして月に一度、ものづくり体験活動を熊本県伝統工芸館工房で行っている。体験活動の企画運営及び指導は、熊本県伝統工芸館のボランティア組織であり、筆者も会員である「ゆずり葉の会」及び熊本大学教育学部技術教育が行い、毎回3～5人程度が担当している。具体的には平成16年度は20人前後の児童生徒、「フレンドリー」の指導員5人及びユアフレンドに参加している大学生2人程度を対象に、木工や竹工、伝統継承の遊び等の活動を行った。児童生徒が製作した作品を図2に、児童生徒の製作風景を図3に、ボランティアによる教授の様子を図4に示す。また、これまでに行ったものづくり体験活動の内容を表2に示す。なお、本事業の一部は熊本県伝統工芸館が採択された「伝統文化子ども教室」の補助金により運営されている。

表1 適応指導教室「フレンドリー」の活動の内容とそのねらい(平成14年度)

曜日	午前活動(9:30～12:00)	午後活動(13:00～15:00)
月曜	コンピュータ活用学習 興味・関心の高い活動を通し、集中力、持続性、問題解決への意欲を養う。	個別指導 ・個別カウンセリング 児童生徒の悩みや困っている事への相談活動を通し、心を安定させるとともに、自分自身を見つめ直す機会とする。 ・自主学习 学習意欲を高めると共に、学習内容を自分で設定することにより、自分で決定することの大切さを学び、自主性や自信を育てる。 ・家族教室 相談の保護者が自由に交流できる場。
火曜	運動活動 身体を動かすことにより、心の解放を図る。	
水曜	造形活動 共通の造形活動を通して、協力することや一緒に活動することの楽しさを体験する。	
木曜	仲間作り活動 ゲームやグループエンカウンター等を通し、友人関係の拡大と深化を図る。	
金曜	所外体験活動 (バスハイキング、キャンプ、木工体験など)	活動の場所を教育センターの外に求め、体験活動等を通して生活圏の拡大を図る。活動内容については、児童生徒の興味・関心を考慮する。



(a) 額縁



(b) 万華鏡

図2 児童生徒の作品例



図3 音の出るおもちゃ製作風景



図4 紙鉄砲教授風景

表2 ものづくり体験活動の実施内容

実施月	製作教材	使用工具	材料	備考
平15年7月	木の箱	鋸	端材	
9月	木の箸	切り出し小刀・鋸	けやき	
10月	割り箸鉄砲		割り箸、輪ゴム	競技会
11月	竹とんぼ	切り出し小刀	真竹	
12月	ペーパーナイフ バターナイフ	切り出し小刀、 鉋、紙やすり	けやき、かし、真竹	オイルフィニッシュ
平16年1月	積み木	鋸、鉋、紙やすり	杉、檜材	
2月	額縁	切り出し小刀、鋸	ラワン材、ボンド	
3月	音の出る木のおもちゃ	切り出し小刀	SPF材、檜材、ボンド	
4月	竹の箸	切り出し小刀	真竹	
5月	竹とんぼ	切り出し小刀、電動ドリル	真竹	
6月	紙鉄砲	切り出し小刀、鋸	真竹、新聞紙	競技会
7月	万華鏡	はさみ、カッター	アクリルミラー、紙筒、マスキングテープ、両面テープ、包装紙、万華鏡の“具”	
9月	木の箸	紙やすり	黒檀	オイルフィニッシュ
10月	竹とんぼ	切り出し小刀、電動ドリル		
11月	簡単な本棚	鋸、金槌、錐	杉、釘	
12月	ペットボトルでトロフィー	ホットボンド、ホットカッター	ペットボトル	
平17年1月	ペーパーナイフ バターナイフ	切り出し小刀	真竹	
2月	竹の箸	小刀、鉋、紙やすり	真竹	箸の握り方の説明

4. 教材の教育的効果の検討

4.1 調査方法及び調査対象

ものづくり体験活動用教材の教育的効果を検討するためにアンケート調査を行った。アンケートは児童生徒用、「フレンドリー」指導員用、大学生用の3種類を作成した。児童生徒用のアンケートは、表3に示すように、簡単に回答できる選択式とし、さらに無記名とした。また、指導員及び大学生向けのアンケートには記述式を併用し、指導員及び大学生からみた児童生徒の取り組みや、ものづくり体験と社会的自立への効果についての回答を得た。また、各項目に対して「思う」を+2、「思わない」を-2、「どちらともいえない」を0、さらにそれぞれの中間を設けた5段階による評価を行った。

4.2 児童生徒

児童生徒のアンケート結果を図5に示す。図5より、全体の項目の平均が0.79という高い評価を得た。ただ、「生活に活かそうと思うか」の問いについての点数が低い。これはものづくり体験で得た経験を「実際の生活」に活かすという設問に具体的なイメージがわかなかったものと思われる。さらに、記述式による設問「今後作ってみたい物があれば書いてください」の項目に、「今度は、もう少し難しい物に挑戦したい」や「もう一度ナイフを作りたい」とする回答があり、個人差はあるが、児童生徒のものづくりに対する興味関心及びものづくり体験活動への参加意欲が高いことが明らかとなった。

次に、設問「作品を作り上げる自信はあるか」の結果を図6に示す。本項目は、図5の他の項目に比べて-0.14と低い。また、標準偏差の値が大きく、児童生徒の個人差によるばらつきがみられる。さらに、小学生と中学生との間にも違いが見られるが、教材別の結果の値は大差ない。さらに、図7はものづくり体験参加回数と自信の関係を表している。図7より、ものづくり体験の参加回数が多いほど製作に対して自信を持つとはいえない結果となった。これらについては、児童生徒に自信を持たせるための指導法や教材の開発が必要と言える。

4.3 指導員・大学生

指導員及び大学生のアンケート結果を図8に示す。図8より、全項目の平均が1.71という高い評価を得た。最も低い項目でも1.44であり、全ての項目に対して、高い評価を得ている。また、記述式によるものづくり体験と社会的自立への効果についての問いでも、「達成感」「自信を持つ」「やれば出来る」「充実感」「明るさ」「じっくり取り組む」「何か感じる」等肯定的な意見が多かった。

以上のことから、児童生徒及び指導員・大学生双方から

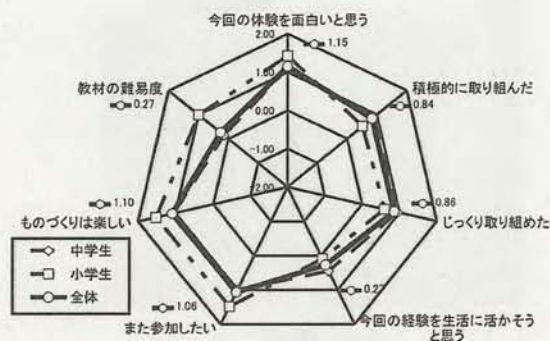


図5 児童生徒の評価

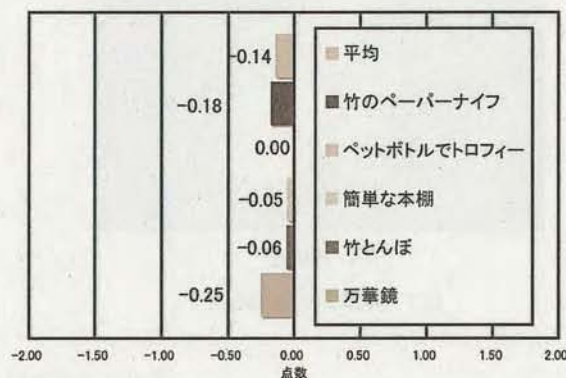


図6 作品を作り上げる自信はあるか

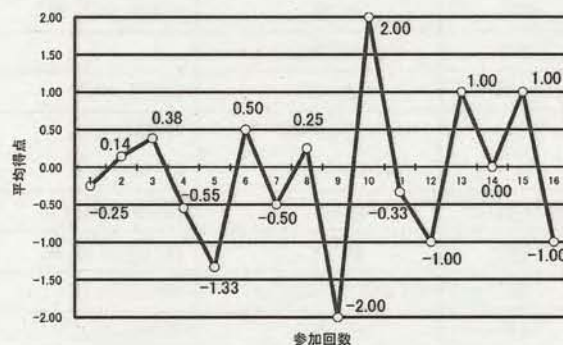


図7 ものづくり体験参加回数と自信の関係

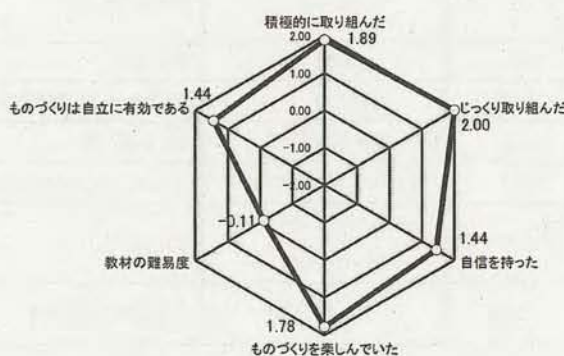


図8 指導員・大学生の評価

表3 児童生徒用アンケート用紙

ものづくりについてのアンケート

(小学校・中学校) 学年()年生 (男子・女子)

1. ものづくり体験への参加は何回目ですか？わかる範囲で今までに自分が参加した回に○をつけてください。

実施日	作った作品	実施日	作った作品
平 15年7月	木の箱	3月	音の出る木のおもちゃ
9月	木の箸	4月	竹の箸
10月	割り箸鉄砲	5月	竹とんぼ
11月	竹とんぼ	6月	紙鉄砲
12月	ペーパーナイフ・バターナイフ	7月	万華鏡
平 16年1月	積み木	9月	木の箸
2月	木の額縁	10月	竹とんぼ

2. 次の質問で、あてはまる□にチェック(レ)をつけてください。

- ・ 今日のものづくり体験をおもしろいと思いましたか？ 1 2 3 4 5
 思 う □ □ □ □ □ 思わない
- ・ 今日のものづくり体験に積極的に取り込みましたか？ 1 2 3 4 5
 取り組めた □ □ □ □ □ 取り組めなかった
- ・ 今日のものづくり体験にじっくり取り込みましたか？ 1 2 3 4 5
 取り組めた □ □ □ □ □ 取り組めなかった
- ・ 今日のものづくり体験で学んだことを生活に生かそうと思えますか？ 1 2 3 4 5
 思 う □ □ □ □ □ 思わない
- ・ いろいろなもの(作品)を作り上げる自信はありますか？ 1 2 3 4 5
 自信あり □ □ □ □ □ 自信なし
- ・ またものづくり体験に参加したいと思えますか？ 1 2 3 4 5
 思 う □ □ □ □ □ 思わない
- ・ ものづくり体験は楽しいですか？ 1 2 3 4 5
 楽しい □ □ □ □ □ 楽しくない

3. 今後、こんなものが作ってみたいというものがあれば書いてください。

.....

.....

.....

高い評価が得られ、本体験活動の有効性が明らかとなった。また、教材別では「竹とんぼ作り」が1.23で最も高く、その他の「万華鏡」、「ペットボトルでトロフィー作り」、「簡単な本棚」は0.8程度と低い値を示した。このことより、より効果のある教材についての検討が必要であることが明らかとなった。さらに、図4の項目「教材の難易度」に見られるように小学生と中学生では、教材に対する感じ方が異なっており、難易度も含め教材の検討が必要であると言える。

4.4 ものづくり体験活における児童生徒の様子

次に、児童生徒のものづくり体験活動の様子の観察から考察を行った。児童生徒は、積極的にものづくりに取り組んでおり、また分からない点を人に尋ねるなど、コミュニケーションを多くとることが出来ていた。図9に示す様子は万華鏡の中に入れる“具”を選んでいる場面であるが、みんなでわいわいとはしゃぎながらとても楽しそうに選んでいる姿が見られた。また、図10に示すような掃除や作業台の移動など体験活動の前後における集団行動においても児童生徒は協力的かつ積極的に活動しており、本体験活動がコミュニケーション能力の育成にも寄与しているといえる。

5. おわりに

本研究で開発したものづくり体験活動用教材は、不登校児童生徒に、完成した時の喜びや感動を体験させることができ、教育的効果があることが明らかとなった。さらに、児童生徒はものづくり体験を通して、ものを作ることの喜びや、作り上げた時の達成感を感じると同時に、大学生やボランティア等の異年齢の人々とふれあうことができ、コミュニケーション能力の育成にも効果的である。さらに、熊本市教育センターが主催するものづくり体験活動は、問題解決型学習を含む体験的な学習であり、自ら学び、自ら行動し、問題を解決する能力や、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など



図9 万華鏡の“具”を選ぶ児童生徒



図10 作業後の掃除風景

の「生きる力」の育成に資する可能性が高いといえる。今後も引き続き不登校児童生徒に対するものづくり体験活動用教材の改良・開発を行うなど、他機関と連携したものづくりを中心とした支援活動を行っていきたい。本研究を遂行するにあたって、連携・協力いただいた、熊本市教育センター並びに、熊本県伝統工芸館の皆様へ深謝いたします。

参考文献

- 1) 文部科学省:データからみる日本の教育 2004、(2004)
- 2) 労働省・文部省:ものづくり教育・学習に関する懇談会、(2000)
- 3) 内閣府:ものづくり懇談会提言、(2000)
- 4) 文部省:第15期中央教育審議会第一次答申、(1996)
- 5) 熊本市教育センター:教育相談事業、
<http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/center/zigyo5.html>

Abstract

Recently, school refusal have been increasingly complicated and diversified relating to the factors and the background, therefore further devise is needed in order to tackle those issues. This study examines both the experience and the educational effects of the experimental activities of crafts making in the adaptation class targeted at school refusals. The class was organized by Kumamoto Municipal Education Center as a part of a program called "Friendly" to stimulate creativity, cooperativeness and interest in crafts making for school refusals. We contributed this program as instructors to assist the teaching stuffs and instructed the making crafts as helicopters of bamboo, chopsticks and musical instruments among others. This program got good results; school refusals were more interested in making traditional crafts, experienced pleasure and got good impression. This program clearly shows high educational effects for school refusals.

Keywords: School refusal, Crafts making, Contribution to the community, Hands-on learning, Zest for living